

# 中国文化大革命期における文化財保護をめぐる一考察

姚 遠<sup>†</sup>

## The Historical Preservation in the Chinese Cultural Revolution

Yao Yuan

What was the extent of damage to China's cultural properties during the Cultural Revolution? Why had many cultural properties survived the turbulence of that period and have hitherto been sustained? No unified opinions have been reached on these matters. Through a careful review of the process of historical preservation during the Cultural Revolution, I found that although the cultural relics were destroyed in some way, the extent and scale were not as great as people imagined. The major cultural properties on the national-level protection list were basically intact; those on the provincial-level protection list were also largely preserved. Many ordinary cultural relics were protected as well. This paper suggests that the damage to cultural relics was not the direct product of political movement during the Cultural Revolution, and their destruction was not a deliberate plan of the party-state. Large-scale damage to cultural properties took place during the "Destroying the Four Olds" Campaign, when the activities of the young, unruly Red Guards exacerbated the political and social chaos of 1966. Due to the rapid change of target of the Revolution in 1967, the duration of the Campaign was short and its damage was relatively limited. The perception of cultural heritage was far from uniform among the Red Guards. Some had taken the initiative to protect the national-level cultural properties. The State Council and some local authorities also took important measures to avoid damage to cultural heritage. The Central Cultural Revolution Group had never issued any documents to authorize the destruction of cultural properties on the protection list. In contrast, it even supported the Party Central Committee's decision in 1967 to issue the Proposals for Protecting Cultural Relics and Books in Proletariat Cultural Revolution, which prohibited massive destruction of the cultural relics. After the establishment of the State Council Leading Group for Affairs of Library and Cultural Heritage in 1970, the cultural preservation work recovered gradually and many achievements were made thereafter.

### 1. はじめに

遼寧省義県に、関野貞、伊藤忠太、梁思成等の諸先生の研究によって有名な遼代の古刹、奉国寺がある。1961年、奉国寺は国務院が公布した第1回の全国重点文物保护单位に列せられた。1966年の夏、「破四旧（古い思想、文化、風俗、習慣を打ち壊す）」運動がクライマックスに達した頃、瀋陽市のある大学の紅衛兵が奉国寺を襲い、仏像を廃棄しようとしたが、現地の文化局の幹部に諫められ、押し止められた。数日後、清華大学の紅衛兵も奉国寺に入り、「文物古跡を保護せよ」というスローガンを貼った。その後、阜新煤鉅学院の紅衛兵が奉国寺に入り、このスローガンを讀んだ後、歩き回って去った<sup>1</sup>。奉国寺は文革の間も完全に保存され、2012年には中国世界文化遺産暫定リストに収

---

<sup>†</sup> 南京大学政府管理学院准教授

録された。奉国寺という興味深いケースにおいては、文革中、文化財の扱い方に破壊と保護という2つの側面があったことが伺える。また、奉国寺が保護されたのは偶然なのか、あるいは全国各地に類似の状況が存在したのか、という問題点が出てくる。

中国における「文物」という概念は、日本の文化財とは異なり、無形文化財、民俗文化財を含まず、有形文化財に限定される。ゆえに本研究における「文物」も、革命史跡地、記念建造物、古建築、石窟寺院、遺跡、古墳などの「史跡」、特にその文化的価値を政府が認定し、それを国家が保護する「文物保護単位」を指し、絵画、工芸品、書跡、典籍、古文書などの可動文化財は含まない。文革中における可動文化財の保護に対する考察は、今後の研究課題としたい。

文化大革命が「文化」を対象とする「大革命」である以上、古い物を捨てて新しい物を確立させようとした、いわゆる「革命」においては、文物が「革命」の対象となったのは、ごく当然のことであった、という素直な考え方があろう。先行研究においても、文革期間に文物が破壊された現象は議論されているが、文化財の保護に関する専門的な討論はわずかである。印紅標、金春明、米鶴都らの論文は「破四旧」運動の間に文物が破壊された現象について言及している<sup>2</sup>。文革研究の専門書のなかにも、文革中の文物破壊に関して論じたものがある。例えば、デリック・マクファーカーとマイケル・シェーンハルスの『毛沢東 最後の革命』、金春明の『文化大革命史稿』、席宣と金春明の『文化大革命簡史』、王年一の『大動乱の年代』、鄭謙と張化の『毛沢東時代的中国（三）』、江沛の『紅衛兵狂飈』、高皋と嚴家其の『文化大革命十年史』などである。だが、これらの研究の多くは文革の政治過程についての全体的な分析で、文物保護については専門的に深く検討していない。ある研究は文革中に文物がひどく破壊されたことを強調しているが、多くの文物が保護された一面にはあまり言及していない。例えば、席宣と金春明の『文化大革命簡史』では「全国各地の多数の古代寺院、祠堂、牌坊などの古建築と文化遺産が破壊された」、「わずかの特別に保護されるところだけは例外である」と判断している<sup>3</sup>。

もちろん、文革中に多くの文物が破壊されたことは事実である。だが国家文物局の元顧問である謝辰生は、前述の観点とは異なる見方を提示した。謝辰生は1949年以来、文化部文物局、国家文物局業務秘書、文物処副処長、研究室主任、副秘書長などを歴任していた。文物保護管理暫行条例と中華人民共和国文物保護法の主な起草者でもあり、1949年以来の各時期の中国文化財行政の当事者で生き証人だと言える。彼は文革の間、文物は破壊されたと同時に保護もされた、という両面性を指し示し、破壊は人々に想像されたような驚くほどの程度ではなく、90年代以来の破壊の程度にも及ばないと考えた。その根拠の一つは、紅衛兵による「破四旧」が文物を破壊したのは短時間のことだけであること。そしてもっとも重要なのは、周恩来の「極力挽回」の措置が文物の破壊を制止するのに巨大な役割を果たした点だった。そのため、180あまりの全国文物保護単位のうち、チベットの一カ所以外はすべて保護されたのだった。それだけでなく、その時期の文化財保護は、兵馬俑の発見などの、重大な考古学上の成果につながった<sup>4</sup>。

謝辰生は新たな観点こそ提出したが、その観点に基づいて詳しく論じた文章を公表していない。またその観点そのものも学術界では重視されていない。だが現在、全国各地では、おびただしい数の文物保護単位が、依然としてよく保存されていると考えられる。文革中、文物はどの程度まで破壊されたのか。どんな原因によって多数の文物が現在まで保存されたのか、誰によって文物が破壊され、誰

によって文物を保存する政策が決定されたのか。これらの問題点についての観点はまだ一致していない。本論文は文革中の文物の破壊と保護の歴史を回顧し、破壊の程度と保護の原因を検討するものである。

## 2. 「破四旧」運動と文化遺産の破壊

文革期間における文物の破壊のクライマックスは、1966年の夏に始められた「破四旧」運動である。1966年5月16日の党中央政治局拡大会議と1966年8月の第8期11中全会によって、文化大革命は全国で全面的に展開された。1966年6月1日、『人民日報』は社説「横掃一切牛鬼蛇神（牛鬼蛇神を一掃せよ）」を發表し、「中国共産党中央委員会通知」（五一六通知）を伝達した。この社説が「プロレタリア文化大革命は、すべての搾取階級が数千年にわたってつくり出した、人民を毒する古い思想、文化、風俗、習慣を徹底的に打ち破り、取り除いて、広範な人民大衆の中に、全く新たなプロレタリアートの新しい思想、文化、風俗、習慣をつくり出し、形づくっていかうとするものである」と提唱した。8月8日、第8期11中全会で通過した「プロレタリア文化大革命についての決定」（16条）は、再び「破四旧」の政治的意義を強調していた。「牛鬼蛇神を一掃せよ」と「16条」は、紅衛兵が「破四旧」運動を起こすに至った、直接的思想的基礎と根拠である。とはいえ、この二つの文書で言及された、「四旧」の打破は、風俗習慣の刷新に関するイデオロギーの面からの批判と革命であり、後の紅衛兵による「破四旧」運動とは同一視できない<sup>5</sup>。言い換えれば、この二つの文書は無形の古い観念と風俗の刷新を強調したもので、有形の文化財の廃棄には言及していなかったのである。

「破四旧」運動は実際には、北京の紅衛兵が「文化大革命」に対する独自の解釈に基づいて起こしたものだ。1966年8月17日、北京第二中学校の紅衛兵はサービス業の「四旧」を打ち壊そうと決定した。8月18日、北京では、百万の民衆が文化大革命を祝う大会が行われ、毛沢東は全国から上京してきた紅衛兵と天安門広場で会見した。この大会の後、紅衛兵運動は全国に拡大した。北京では、厳密に言えば「破四旧」運動は8月の下旬から9月末まで約40日間続いた。運動は最初は古い伝統と風俗を打ち破ることに重心を置き、商店や街の名前を変更したり、ある服装とヘアスタイルを禁止したりした。しかし、二、三日後、その範囲は広がり、暴行へとエスカレートし、大規模な社会の混乱と破壊をもたらした<sup>6</sup>。暴力による文物の破壊も、紅衛兵による破壊活動の一端である。1966年8月23日、北京体育学院の紅衛兵、教員、職員など273人は、頤和園の仏香閣に行き、一部の仏像を打ち壊した。数日の間に、北京の市レベルの文物保護単位である昌平県漢代城跡、延壽寺銅造仏像と聖安寺は徹底的に破壊、廃棄された。これは「破四旧」運動による重要文物の破壊事件の最初の幾つかの例である<sup>7</sup>。

「破四旧」運動は急速に北京から全国に拡大し、8月～9月に、各地で大量の文物が打ち壊される事件が起こった。「破四旧」運動による文物への破壊は、特に二つの種類の古跡を対象とした。一つは仏教、道教の寺院である。それらの中に保存されていた仏典、神像、扁額、神位などは打ち壊されて焼かれた。ただ、寺院の古建築は打ち壊される対象ではなかった。もう一つは、当時の政治と深く関わりがあった「反動」的人物、例えば武訓、海瑞に関する古跡、古墓などである。1951年に武訓と映画『武訓伝』は批判されたが、それでも山東省冠県にあった武訓墓は、文革の前に文物保護単位リストに収録されていた。だが1966年8月下旬、現地の中学校の紅衛兵は武訓墓を打ち壊した。1965

年11月10日、上海『文匯報』に「評新編歴史劇『海瑞罷官』（新編歴史劇『海瑞罷官』を評す）」が発表され、海瑞は「反動的な支配者」として批判された。1966年9月、広東省の省レベルの文物保護単位である海瑞墓は海南の紅衛兵によって打ち壊された。1966年11月、北京師範大学の学生だった譚厚蘭は、紅衛兵を率いて山東省曲阜で「孔子討伐」を行い、孔廟、孔府、孔林の「三孔」の扁額、石碑、古文書を含む多くの文物を破壊した。これは文革期間における、もっともひどい文物破壊事件の一つである。これに加え、紅衛兵が「抄家」で獲得した大量の古書籍や古書画も焼き払われ、古銅器は廃品として回収され、製錬された。

「破四旧」運動において、文物はどのように破壊されたのか。これについて、広く伝えられている観点とは、北京で1958年に行われた第1回文物調査では、保存されていたものは6843件あったが、うち4922件は破壊されており、その大部分は1966年の「破四旧」運動において被害に遭った、というものだ。影響力をもつ中国語での研究書、『文化大革命簡史』と英文による研究書『毛沢東 最後の革命』は、いずれもこういう観点を持っている<sup>8</sup>。確かに、「破四旧」運動では、文物古跡がひどく破壊されたが、「4922件」という数字に関しては、史料が不適切に引用された疑いがある。「4922件」という説をもたらした、もっとも早い情報源は1985年に編集された『宣伝手冊・徹底否定文化大革命（宣伝手引き・文革を徹底的に否定）』にある、北京市文物局の趙学勤氏の「北京の文化財が文化大革命中、大きな災難に」という文章である。原文は、80年代の第二回全国文物調査の統計によると、「1958年の第一回全国文物調査では、6893件の文物の内、4922件が破壊されており、大部分は文革の間に破壊された」となっており、「大部分が1966年8月、9月に破壊された」ということではない。実際にも、この4922件の文物に対する破壊は第二回全国文物調査が対象とした1958～1985年の27年間に発生しており、この期間には大躍進や文革も起きている。つまり、特に1966年の8、9月を指すわけではないのである。なお、これらの文物は『毛沢東 最後の革命』においては英語で「officially designated」と記されているが、これは中国語の「政府指定」を意味しない<sup>9</sup>。これらの文物は第一回文物調査において資料として記録されただけで、法律上の保護対象には属しておらず、そのリストもこれまで公布されていないため、実際の保存状況は確認できない。

その一方で、「破四旧」運動を含めた文革期における「文物保護単位」の保存状況に対する考察は可能である。中華人民共和国の文化財保護制度は、文化大革命の前に確立された。1956年、国務院は「關於在農業生産建設中保護文物的通知（農業生産における文化財保護に関する通知）」を發布し、歴史上初めての本格的な文化財調査が全国規模で開始された（第一回全国文物調査）。その後、文物保護単位制度の設立も着手された。1965年までの間に、全国にある5572の省レベルの文物保護単位が公布された<sup>10</sup>。1961年、中華人民共和国初の文化財保護に関する包括的な行政法規、「文物保護管理暫行条例（文化財保護と管理に関する暫定条例）」が国務院によって制定された。同時に、第1回指定の180件の全国重点文物保護単位リストも公布された。この数千カ所の全国重点文物保護単位と省レベルの文物保護単位の重要性は、日本で1950年に文化財保護法によって指定された、国宝と重要文化財に相当すると思われる。では、文革の間、これらの文物保護単位の保護はどのような状況であったのだろうか。

まず、全国重点文物保護単位の状況をまとめると、1961年に国務院によって公布された180件の全国重点文物保護単位の内、ガンデン寺（甘丹寺）1件を除くすべてが基本的に完全に保存されてい

る。河北でも、21 件の全国重点文物保護単位の内、ごく一部は部分的に破壊されたが、その他は基本的に完全に保存されてきた<sup>11</sup>。元南京博物院院長、文革の期間、江蘇省文物管理委員会弁公室主任であった梁白泉の回想によると、江蘇では文革期に滅失したり破棄されたりした全国重点文物保護単位は一つもなかったという<sup>12</sup>。ごく少数の全国重点文物保護単位、例えば曲阜孔廟の内、一部の古碑、扁額と古文書は「四旧」として破壊されたが、歴史的な建造物である孔廟自体は文物として保護された。

次に、省レベルの文物保護単位の状況を整理する。1956～65 年に地方政府によって公布された省レベルの文物保護単位は、地方による差こそあれ、総体的に大部分が保存された。北京市と華北、東北、華東、華南、西北の五つの省を例として考察してみよう（以下の表を参照）。北京において、39 件の市レベル（省レベル相当）の文物保護単位のうち、3 件（昌平区漢代城跡、延壽寺銅造仏像、聖安寺）は破壊された<sup>13</sup>。河北省にある 155 件の省レベルの文物保護単位のうち、49 件は破壊された。例えば、東光県にある宋代の鉄造菩薩像は文革初期に「四旧」として叩き壊された<sup>14</sup>。江蘇省においては、342 件の省レベルの文物保護単位のうち、51 件が破壊された。例えば、昆山県の妙峯塔、呉県の敵楼、呉県の聖恩寺などである<sup>15</sup>。広東省においては、63 件の省レベルの文物保護単位のうち、12 件はひどく破壊され、リストから抹消された。例えば、海口市の海瑞墓、陽山県の涅槃塔などである<sup>16</sup>。黒龍江省においては、13 件の省レベルの文物保護単位のうち、4 件は徹底的に破壊された。そのうち伊蘭県の関岳廟、寧安県の清真寺は「破四旧」運動によって破壊された<sup>17</sup>。青海省においては、文革以前に 62 件の省レベルの文物保護単位が公布されたが、1982 年にリストが調整され、うち 13 件がひどく破壊されたり、あるいは発掘調査によって保護の価値を失ったりして、文物保護単位のリストから抹消された<sup>18</sup>。

以上によると、文革期も全国重点文物保護単位は基本的に完全に保護され、省レベルの文物保護単位も大部分は保護されたと結論づけられる。なお、大量の文物保護単位が保存されたのはなぜだろうか、いったい誰によって文物が保護されたのか。これらの疑問点を解明するためには、紅衛兵の役割に対する考察が必要である。

紅衛兵による文物の破壊は、果たして政府が組織した行為なのだろうか。少なくとも公共財産に対する破壊は、今日思われているよりもはるかに組織的な政府承認による制裁であり、周恩来を含めた

表 1. 一部の省レベル文物保護単位の保存状況

地域	文革の前に 公布された件数	文革後にリストから 抹消された件数 *	文革の間に基本的に 保存された件数	基本的に保存された割合
北京市	39	3	36	92.3%
河北省	155	49	106	68.4%
江蘇省	342	51	291	85.1%
広東省	63	12	51	81.0%
黒龍江省	13	4	9	69.2%
青海省	62	13	49	79.0%

\* 文革後に省レベルの文物保護単位のリストから抹消された件数は、徹底的に破壊されて滅失した場合、発掘調査によって文物の価値を失った場合と、部分的に破壊されて市、県レベルの文物保護単位へと格下げされた場合を含んでいる。



中央の指導者が直接責任を負っていた、と述べている<sup>19</sup>。この論点を証明するため、マックファーカーらは蘇州市忠王府と佛山市経堂古寺のケースを引用している。1966年に「破四旧」のため、佛山市文化局は経堂古寺を1962年に公布された文物保護単位リストから抹消したと言うのだ<sup>20</sup>。しかし、リストから抹消することは、取り壊す決定を下すことを意味しない。経堂古寺は文革の間も保存され、現在も依然として佛山の市レベルの文物保護単位である。また以下のような引用もある。太平天国の指導者であった忠王の李秀成は、1964年、晩節を汚し、「裏切り者」だと認定された。しかも1966年の中央政治局拡大会議では、周恩来によって「蘇州の忠王府を取り壊そう」との呼びかけが行われた<sup>21</sup>。しかし、その後国務院は忠王府を取り壊そうという指令を下さなかった。忠王府は1960年からは蘇州市博物館として丁寧に使用され、文革中もほとんど破壊されなかった。周恩來の呼びかけは自身の「晩節」を全うするための政治的ジェスチャーだったと理解すればよいであろう。

「組織された破壊」という議論とは対照的に、実際には、紅衛兵運動の始まった頃、『人民日報』と新華社では、紅衛兵らに文物を保護しようと呼びかける文章が発表された。例えば、1966年8月29日に、『人民日報』は1面のトップ記事として、「紅衛兵を高度な組織性と規律性のある青少年の革命チームへと建設せよ—紅衛兵は毛主席の指示に従って解放軍を学ぶ」を掲載し、文物を保護するよう宣伝している。その記事では、(開封市の)多数の紅衛兵に、「16条」と『毛主席語録』を携帯させ、「四旧」を反映した名称を見たらそれを変更するよう積極的に申し出させると同時に、文物と古跡をまじめに保護するよう呼びかけている。実際、紅衛兵らは禹王台公園に来うと、職員に以下の四つの提案を申し出た。公園の名前を開封人民公園と変更すること。入り口に毛沢東主席の肖像画を掛けること。公園の壁に毛主席語録を書くこと。文物と古碑に関する批判的な説明板を設置すること。

紅衛兵の間で、文物に対する態度は一枚岩であったのだろうか。幹部の子女などの「紅五類」をリーダーとする、熱狂的な高校生の紅衛兵と比べ、大学生の紅衛兵は相対的により理性的で、国家が財産とする文物は保護しようという意識を持っていた。北京大学の1965年の卒業生、鄭克中の回想によると、1966年夏、清華大学附属中学校の紅衛兵が北京大学へ「破四旧」を行いに来ると聞くと、北京大学文化革命委員会主任である聶元梓の呼びかけに応じて、北京大学の紅衛兵は急いで西門に行き、西門の石獅子と華表を保護した。鄭氏は、これが文革中、紅衛兵が「四旧」を保護した唯一のケースだろうと考えた<sup>22</sup>。しかし、大学生の紅衛兵が主体的に文物を保護したケースは決してこれだけではない。前述の、清華大学の紅衛兵が奉国寺を保護したケース以外にも、以下のようなケースがある。1966年8月24日、杭州第四中学校などの中高生の紅衛兵、二千人余りが、靈隱寺を取り壊そうとした際、浙江大学の大学生たちは全市で提案のビラを配り、市民に文物を保護しよう、靈隱寺を保護しようと呼びかけた。8月27日、周恩来と浙江省党委員会の指令をうけ入れた紅衛兵らが靈隱寺を去ると、靈隱寺は破壊を免れた<sup>23</sup>。8月26日、洛陽の龍門石窟が洛陽第八中学校の紅衛兵による破壊に直面した時、洛陽農機学院の大学生らは龍門石窟に行くと、辛抱強く中高生の紅衛兵を説得し、一週間、そこに留まって守った。その結果、最終的に龍門石窟は保護された<sup>24</sup>。

### 3. 「破四旧」と政府の介入

旧中央宣伝部、旧文化部と旧北京市党委員会は、文革の開始後もっとも早く「三旧」として打倒され、改組された。そのため、中央政府の文化財行政の管理機関、つまり文化部図博文物管理局(以下、

文物局と略)は機能しない状態になった。1966年夏から1970年の国務院「図博口領導小組」の設立まで、中央の文化財行政の機能は長期にわたって停止したままだった。

それにもかかわらず、周恩来が主管した国務院は何回も直接文物を保護しようと指示した。「破四旧」運動の開始直後の1966年8月下旬、周恩来は故宮を閉鎖し、故宮に進駐し、守衛するよう軍隊に指示した<sup>25</sup>。北京の雍和宮と白雲觀、四川の宝光寺、承徳の外八廟や広東の南華寺などのケースでも、周恩来の指示の下、閉鎖あるいは軍隊の進駐によって保護された<sup>26</sup>。前述した「裏切り者」李秀成への批判を理由とした忠王府に関する発言以外、これまで周が文物保護単位の破壊に関わった証拠はほとんどない。周恩来研究者である高文謙は、文革の初期、周は紅衛兵運動そのものは肯定しながらも、党の政策の宣伝と解釈に重点を置き、運動の熱狂性と破壊性を極力弱め、コントロール可能なところまで導こうとしたと論じている<sup>27</sup>。

「破四旧」運動が発生した1966年は、国務院によって文物保護管理暫行条例が定められた1961年の僅か五年後だった。条例第1条では、各級の人民委員会は管轄区域内の文化財を保護する責任をもつことが明らかに定められている。1950年代後半から、国務院は文化財を破壊した事件を処理した上、地方政府に文化財の保護を強化するよう求める通達を何回も下した。1966年後半、まだ「奪権」闘争によって権力が奪われる前の各地方の党委員会や人民委員会（地方政府）は、依然として文革の前に国務院が定めた法令や政策に従い、文物を保護する責任を尽くした。

まず第一に、地方政府は文物を保護するよう指示した。1966年8月、中共南京市委員会は文化革命小組を成立させ、文物古跡の保護や公文書と図書の保護などを求める十条の意見を出した<sup>28</sup>。9月10日、甘肅省人民委員会は同省文化局の「プロレタリアート文化大革命運動における文物の保護に関する報告」を全省に通達した<sup>29</sup>。10月8日、陝西省党委員会の文化革命弁公室は「文化大革命運動の『破四旧』における重点文物の保護に関する意見」を公布した<sup>30</sup>。11月1日、山西省人民委員会は「プロレタリアート文化大革命運動における文物の保護と悪書の処理に関する通知」を公布し、封建的迷信の打破と我が国の文化遺産の保護を厳格に区別し、人為的な破壊を防ぎ、文化財を上手に保護するよう命じるとともに、中央と省政府が明確に定めた重点文物保護単位（古い建築、彫刻、石刻など）について、党の政策と国務院の文物保護条例によって保護すべきであると指示した<sup>31</sup>。地方政府による、文化財保護に関するこれらの指令を鑑みれば、党中央委員会や国務院が、文化財の破壊を許可したり、励ましたりする指令を出したとは判断できないであろう。

第二に、一部の紅衛兵による破壊を食い止めるため、地方政府は文化財保護活動を行ったことがある。1966年8月24日、杭州の紅衛兵が靈隱寺を取り壊そうとした時、浙江省委員会書記の江華は靈隱寺の保護を副省長の李豊平に求め、紅衛兵の破壊を阻止した<sup>32</sup>。8月26日、河南省洛陽市第八中学校の学生たちが「破四旧」を口実に、龍門石窟の仏像と經書を破壊しようとしたとき、洛陽市委員会書記は文物を保護させるため、即座に洛陽農機学院の教師と学生を龍門石窟に行かせ、破壊計画を中止させた<sup>33</sup>。山東省の地方政府も紅衛兵の武訓墓と「三孔」に対する破壊を制止しようと努力したが、成功しなかった。1967年6月30日の『人民日報』の記事には、1966年8月下旬に紅衛兵が武訓墓を取り壊そうとしたとき、地方の「資本主義の道を歩む実権派」が彼らを制止し、「武訓墓は名勝古跡であるため保護すべきだ」と言ったという記述がある。1966年11月に、紅衛兵が曲阜の「三孔」で破壊活動を行ったとき、曲阜県委員会によって制止された。その際、県政府の責任者は、「国

務院の全国重点文物保護單位の標識を打ち破れば、國務院と党中央に反対する行為となってしまうのだ」と言ったという<sup>34</sup>。多数のケースでは、結果として地方政府は紅衛兵の暴走と文物の破壊を制御できなかったとはいえ、地方政府は確かに破壊される過程において、制御の試みを行っている。

第三に、中央文革小組の政治目的は、紅衛兵を権力闘争に利用することであって、文化財の破壊ではなかった。「破四旧」期間においても、国家によって公布された文物保護單位を徹底的に破壊せよという文書上の史料は今まで発見されていない。1966年11月の曲阜「三孔」事件においても、國務院によって立てられた全国重点文物保護單位の標識を見た紅衛兵は、軽率に打ち壊そうとはせず、中央文革小組に指示を仰いでいる。小組の組長の陳伯達は、『『孔府、孔廟、孔林』を焼いてはならず、徴租院のように、封建制度の孔家地主博物館として保存すればよい。孔墳は発掘してもよい。』と指示した<sup>35</sup>。また、1966年8月に、中央文革小組は広東省文物保護單位である南華寺の件について、紅衛兵に「南華寺は国家の重点文物で、保護すべきだ」と指示した。その結果、紅衛兵は一部の扁額と塑像を打ち壊しただけで終わり、歴史的な建造物南華寺は全体として保存された<sup>36</sup>。

総体的に、「破四旧」運動がもたらした文物に対する破壊行為は、時間、範囲、程度からみればかなり限定的であった。「破四旧」は終始、文革の主要な方向ではなく、また文物の破壊も、「破四旧」の中核をなす目的ではなかった。時間的にみれば、「破四旧」運動における文物に対する破壊は、1966年8月～9月に集中しており、各地で1966年末まで続いた。國務院と地方政府は、紅衛兵運動への肯定を前提にしつつも、社会秩序を安定させ、文物を保護するための措置を採用した。1967年初頭以降、文革が「資本主義の道を歩む実権派」に焦点を合わせるようになると、「破四旧」はもはや人々の関心を引くことはなかった。

#### 4. 最高指導部による文物保護政策の決定

1967年初頭に、「破四旧」の巨大な衝撃が過ぎ去った後、毛沢東が速やかに大衆闘争の予先を、文革の中核的な目標である党内の「資本主義の道を歩む実権派」に向けると、造反派による「奪権」の波は早速に全国へと及んだ。同時に、「破四旧」がもたらした文物の破壊が、世界の世論において批判的となった。1967年1月8日の『人民日報』には、「各国の反動派と現代の修正主義者が『文物を破壊し、文化界の名士を迫害した』と中国紅衛兵を中傷している」と言及した記事が掲載された<sup>37</sup>。このような言論は、「破四旧」によって、中共が西側諸国やソ連などの国際世論からの巨大な圧力に直面したことを暗示している。

文革の闘争方向が変わった後、文物のひどい破壊に対し、文物局の幹部で元局長の鄭振鐸の秘書、謝辰生は憂慮を抱き、今後の政治運動における文物へのさらなる破壊を制止しようと願った。1966年末、謝辰生は文化財行政を主管している政治局常務委員、中央文革小組顧問の康生に、「破四旧」期間における文物破壊について報告した手紙を書き送った<sup>38</sup>。その直後の1967年1月27日、中央文革小組の戚本禹は、文物局、中国歴史博物館、故宮博物院、中国科学考古研究所などの十二の機構の代表を召集し、文物保護についての座談会を開いた。会議に参加した文物局の謝辰生や歴史博物館の黄景略などの代表たちは、「破四旧」の間の文物の損失と保護の欠如について報告した。戚本禹は談話を発表し、康生と陳伯達からの文化財保護に関する指示を伝えた<sup>39</sup>。

中央文革小組が1967年の文物保護政策の決定を促進した作用に関する、中央文革小組組長の陳伯



達の回想によると、戚本禹は紅衛兵が「破四旧」の旗印を掲げて文化財を破壊していることを報告した市民からの投書を陳に見せた。すると陳は戚本禹に「この行為をやめさせろ！文物と四旧は混同すべきでない」と指示した。その後、党中央委員会は陳の提案を採用し、文物と図書の保護に関する通達を下した<sup>40</sup>。中央文革小組の組員だった王力の回想によると、毛沢東は康生の提案を受け、戚本禹に命じて、幾つかの古銅器を製錬から救い出させた。戚本禹がこのことについて発表した談話は、日本の共同通信社によって報道された<sup>41</sup>。中央文革小組員の戚本禹の回想によると、彼に座談会を開かせ、図書と文化財の保管機関、考古学研究所、博物館などの機構の意見を聞くよう指示したのは毛沢東自身だった<sup>42</sup>。

この座談会は、党の最高指導部が文化財を保存する方向に方針を調整する前触れだとすることができる。日本の共同通信社は速やかにこれを察知し、1967年2月16日に『古書焼くのは禁止 中共、文化財の保存を要請 壁新聞報道』という記事を発表した。この記事には、こう書かれていた。「中共中央はようやく古い書物や文化財を保護する方針に立ち戻った」、「十六日の壁新聞によると、中央文化革命小組の戚本禹組員は、一月二十七日、北京の図書館、博物館、書店などにおける革命造反派との座談会で、文化財も国民の財産として保存することなどをめぐる態度を明らかにし、関係者に具体的な方法を検討するよう要請した。」。戚本禹は、「私が談話を発表するや否や、日本の通信社がこれを報道した。そのほかの国にも関連記事がある。毛主席は『参考消息』（当時、新華社が発行する内部刊行物）でこれらの記事を読み、喜んだ。彼は私の談話を肯定した。」と回想した<sup>43</sup>。

中央文革小組による促進の下での、1967年の文物保護の措置は以下の通りである。

- 一、民衆の組織に、文化財保護をめぐる提案書を発表させるよう要請した。中央文革小組の要請に応じ、1967年2月15日、文物局、歴史博物館、故宮博物院、中国科学院考古研究所などの13の機構は、造反派の名義で「關於保護革命文物和古代文物的倡議書（革命文物と古代文物の保護に関する提案書）」と「關於保護古旧図書、字画的倡議書（古い書籍と書画の保護に関する提案書）」という二つの共同宣言を発表した。謝辰生が起草した「革命文物と古代文物の保護に関する提案書」には、造反派が革命遺跡と革命記念物の保護の責任を担い、重要な石窟寺院、古建築、文化史跡、古墳を保護すべきだとも指摘されている<sup>44</sup>。
- 二、北京市古書文物清理小組を成立させた。「提案書」発表の直後の2月中旬、北京市文化局、文物商店、中国書店、対外貿易局などの専門家を集めた古書文物清理小組が設立された。この小組の仕事は、中央文革小組からの直接の指導を受けつつ、「破四旧」期間に紅衛兵の「抄家」によって没収された古書籍、書画を収集、整理、保護することや、北京市における革命文物と古建築を調査、保護することだった<sup>45</sup>。
- 三、中央文革小組の保護の指令を全国に伝達した。2月16日、中央文革小組の命令に従い、文物局は役人を山西省大同市、太原市、河南省洛陽市、開封市などの史跡が集中的に所在している地域に派遣し、文化財保護の状況を調査させた<sup>46</sup>。2月28日、文物局は中央文革小組による古銅器の保護に関する指令を公文書で全国に通達し、廃品回収所に集まった古銅器や寺院から没収された青銅の仏像などを現地でうまく保管するよう求めた。3月12日、文物局、故宮博物院、歴史博物館などの文化財関連機構は専門家を派遣し、華東、中南、東北、西南などの地区の各地に、中央文革小組による文化財保護の指令を伝達した<sup>47</sup>。

四、最高指導部の名義で全国に文化財の保護を指示した。3月16日、中共中央、国務院、中央軍事委員会は「關於保護国家財産、節約開革命的な通知（国家財産の保護及び革命における節約に関する通知）」を下達し、各地において文物と図書の管理と保護を強化させ、勝手な処理や破壊が許されないよう、指示した。この通知が全国の都市、農村、軍隊の各単位で張り出されると、文化財の破壊が抑制されはじめた。3月20日、『朝日新聞』は記事「文化財の保護を指令 中共中央デモ手控えも要望」でこの通知を紹介した。

五、もっとも重要な措置は、5月14日に党中央委員会が「中共中央關於在無産階級文化大革命運動中保護文物和図書の幾点意見（プロレタリア文化大革命中における文物、図書の保護に関する幾つかの意見）」を公にしたことだった。2月の二つの提案書が公布された直後、中央文革小組の幹部である楊松友は文物局を訪ね、謝辰生に党中央委員会の名義でこの文書を起草させた<sup>48</sup>。謝辰生は起草した文書において、以下の意見を提示した。「わが国は悠久たる歴史を有し、革命的伝統と優秀な遺産に富み、保存された文化財と図書も極めて豊富である」、「この文化財と図書は国の財産であるため、文化大革命の間においては、その保護と保管を強化しなければならない」、「各地にある重要で典型的な古建築、石窟寺院、石彫像、彫刻、壁画などを保護しなければならない」。

この中国共産党中央委員会の名義で出された通達は、最高指導部の意図を表したものだ。この通達は中央文献研究室が編集した『毛沢東年譜』第6巻（1966～1976）にも収録された。謝辰生は、こう回想する。「毛主席は『参考消息』に掲載された文化財の保護に関する提案書を読んで喜んだ。毛主席は、大衆に学べ、党中央委員会は文化財保護の通達を出すべきだと言った。周総理はじきじきにこの通達の制定に関与し、非常に長い指示を書いて、必ずこの文書を末端機構にも伝えるよう要求した」<sup>49</sup>。この文書が伝達されるや否や、各地は速やかに措置をとり、古建築と図書に対する大規模な破壊を基本的に制止した。

## 5. 全国の文化財行政の再建

1969年の党第九回全国大会の後、文革初期の混乱状態が次第に改善されると、経済や文化関連の各事業が回復し始めると同時に、文化財事業も回復していった。1970年5月1日、周恩来は元文化部文物局局長の王冶秋に、図博口領導小組を成立させ、図書館と博物館と文化財の管理を回復しようと言った<sup>50</sup>。5月10日、全国の図書館と博物館と文化財の行政を指導する「図博口領導小組」（図は図書館の略、博は博物館の略）が正式に成立し、軍宣隊（軍の毛沢東思想宣伝隊の略）の幹部の郎捷を組長、王を副組長に指定した。

1970年7月23日、新華通信社と『人民日報』では、「毛主席の古為今用の偉大な方針に堅実に従ったことで、我が国では文化大革命の中に多くの貴重な文化財が発掘された」という記事が発表された。この記事は文革中における隋・唐時代の東都、洛陽の含嘉倉、元代の大都の和義門などの考古学的発見を紹介し、「これらの文化財は、我が国の歴代の政治、経済、文化、軍事、国際交流などの情況に関する研究と理解を助ける、重要な科学的価値を持っている。」と論じた。1972年7月23日、新華通信社と『人民日報』には「党の文化財の保護政策は堅実に実施されており、我が国の各地の文化財はよく保護されている」という記事が再び掲載された。同記事では、文化財保護の意義を重ねて表明

し、「歴代残されてきた有名な古建築、石窟寺院、石彫像及び古い遺跡、古墳などの重点文物は完全に保護され」、故宮、龍門石窟、殷墟、碑林、莫高窟、雲崗石窟、六和塔、拙政園なども「うまく保護され、一部は国からの支給金による修復を経て、たえず観光客に見学されている」と記されている。

1974年、国家文物事業管理局は國務院に直属し、文化部と並ぶ国家レベルの局になった。文革前の文化部の内部の局としての文化部文物局と比べれば、中央文化財行政の地位は上がったのである。同年8月に、國務院は「關於加強文物保護的通知（文化財保護の強化に関する通知）」を出した。この通知では、林彪に対する批判である「批林批孔」などの政治的意味は強調されたが、具体的な方針は文革前に制定した文物保護管理暫定条例に戻った。

中央文化財行政の再建、および政令の整備が進むにつれ、中国における文化財の保護は次第に回復した。北京市では、1972～76年に、故宮の三大殿、北海の五竜亭と白塔、頤和園の仏香閣と諧趣園、雍和宮、天壇の祈年殿、天寧寺塔、白塔寺塔、智化寺の千仏閣、五塔寺、孔廟の碑亭、碧雲寺、香山の昭廟、正陽門、太廟などで修復作業が行われた<sup>51</sup>。陝西省文化局は、1972年に「關於在農田水利建設中加強保護文物的通知（農地水利工事の際の文化財保護の強化に関する通知）」、1973年に「關於文物工作幾個問題的通知（文化財事業の幾つかの問題に関する通知）」を公布した<sup>52</sup>。1972年、湖南省政府（当時の呼称は省革命委員会）は、省レベル文物保護単位であるとして、100件以上の重要文化財の保護を改めて確認した<sup>53</sup>。1973年、山西省政府は、「關於進一步加強文物保護管理的通知（文化財の保護と管理の一層の強化に関する通知）」を公布した。後に山西省は周恩来の指令に従い、雲岡石窟、南禅寺、広勝寺上寺の三つの国宝の修理を行った<sup>54</sup>。一方、この時期には、馬王堆漢墓、始皇帝陵兵馬俑などの考古学上の衝撃的な発見が公布された。

## 6. 結論

総体的に、文革期間に多数の文物が破壊されたことは事実であるが、全国重点文物保護単位は基本的に完全に保護され、省レベルの文物保護単位の大部分も保護された。1966年後半の「破四旧」運動の期間は、大規模かつ集中的に文物が破壊された、文革のクライマックスであったが、この時期でも、國務院と一部の地方政府は重要な施策をとり、できる限り損失を減少させた。1967年「奪権」の嵐が起こり、文革が新段階に入ると、最高指導部は二つの通達を下し、大規模な文物の破壊行為を抑制した。1970年以降、國務院は周恩来の指導の下で、全国の文化財行政を指導する國務院図博口領導小組と国家文物事業管理局を設立し、国家の文化財事業を次第に回復させた。

国家や市民によるさまざまな保護活動は文革中、できる限り文化財を保護するため、重要な役割を果たした。まず第一に、文化大革命の前に制定された文化財保護の法令と制度、特に文物保護単位の制度と文物保護管理暫行条例は、依然として役割を果たし続けた。1949～1965年の間における文化財事業の発展は、大衆の文化財に対する愛護意識を高めたので、文革中も紅衛兵、市民と労働者は自発的に保護行為を行なった。第二に、「破四旧」運動の間、周恩来及び「奪権」前の地方政府は破壊の危機に速やかに介入し、一部の重要な文化財を救った。第三に、中央文革小組が促進し、党中央委員会によって制定された二つの通達は、「破四旧」運動以来の文化財の破壊の阻止に決定的な影響を及ぼした。注意すべきは、当時、普通の幹部であった謝辰生が、一通の「群衆からの手紙」を契機として党の指導者たちに文化財保護を促した点である。文革中における文化財の保護について考察すれ

ば、謝辰生の「破壊の程度は人々が想像したほど驚くべきものではない」という見方を証明できるのではないだろうか。

本研究は文化財の保護についての考察を通じ、文化大革命という極めて複雑な歴史現象を理解するための新たな視角を提供する。文革期間、文物は破壊されたと同時に、保護もされたという事実から、歴史の複雑性と多様性が認識できるのではないだろうか。この事実の両面性に対しては、一面だけを否定することも、誇張することもできない。当時の文化財の破壊について、「組織され、政府に許可された」、ひいては「周恩来などの指導者が直接的な責任を担った」とする観点は、まだ証拠が不十分である。当時の文革の一部の参加者にとって、文化大革命とは思想上の「人の魂に触れる革命」、つまり古い思想を打ち破り、新しいイデオロギーを立てる革命であり、国家の財産である文化財を破壊することではなかったことを、文化財の保護活動は証明している。文化大革命の一部の過激な理論とそれがもたらした人権の抑圧などの悪質な結果は批判されるべきであるが、同時に、中国、さらには全人類にとっての文化遺産を保護した人々の役割を一切否定することも、できないであろう。

謝辰生が中央文革小組に文物の破壊を制止しようと呼びかけてから 40 年後の 2006 年、84 歳の謝辰生は中国の歴史的な町並みの破壊と、歴史文化名城の保護の立法化について、再び国務院総理の温家宝に投書した。10 月 17 日、温家宝は早急に歴史文化名城保護条例を制定するよう指示し、自筆の返信を謝に送った。2008 年 4 月 22 日、国務院は歴史文化名城・名鎮・名村保護条例を公布した。だが、多くの歴史的都市における破壊は、今に至るまで依然として続いている。90 年代以来、不動産の開発のため、北京、南京などの古い都市で、多数の歴史的町並みが消え、幾万もの四合院、庭園、寺院、会館などが取り壊されている。2011 年までに行われた第三回全国文物調査の統計によると、全国で 80 年代の第二回調査以降に登録された不可移動文物 (immovable cultural property) のうち、44000 件が滅失しており、北京だけでも 969 件が滅失している。現在、中国の文物に対する前代未聞の破壊の主要な原因は、もはやイデオロギーや認識の問題ではなく、経済的利益の問題となっているのであろう。

※本研究は中国国家社科基金項目 (14CZZ042) の助成を受けたものです。

## 註

- <sup>1</sup> 張連義「紅衛兵保護文物古跡 奉国寺五次危難記」『人民日報 (海外版)』2004 年 11 月 17 日。
- <sup>2</sup> 以下の論考を参考。印紅標「紅衛兵破四旧的文化與政治」、石剛『現代中国的制度與文化』、香港社会科学出版社、2004 年。金春明「破四旧、立四新的歴史反思」、『中共中央党校学報』1997 年 1 期。米鶴都「破四旧的表裏」、『炎黄春秋』2012 年 5 期。何立波「破四旧風潮的前前後後」、『党史文苑』2006 年 3 期。
- <sup>3</sup> 席宣と金春明『文化大革命簡史』中共党史出版社、2006 年、106 頁。
- <sup>4</sup> 尚前名「得知少林寺準備上市之後」、『瞭望』2010 年 26 期。
- <sup>5</sup> 紅衛兵の「破四旧」の起源については、印紅標の前掲文を参照。
- <sup>6</sup> 印紅標の前掲文を参照。
- <sup>7</sup> 范瑾、張大中、徐惟誠主編：『当代中国的北京』中国社会科学出版社、1989 年、170 頁。聖安寺は部分的に破壊されたのであって、「徹底的に破壊された」のではない。現在は宣武区の区レベル文物保護単位である。
- <sup>8</sup> Roderick MacFarquhar and Michael Schoenhals, *Mao's Last Revolution* (Cambridge: Harvard University Press, 2006), p. 118. *Mao's Last Revolution*, p. 118.
- <sup>9</sup> 『中国大百科全書・文物博物館巻』、中国大百科全書出版社、1993 年、601 頁。
- <sup>11</sup> 河北学刊特約評論員「認真執行文物保護法 開創我省文物工作新局面」『河北学刊』1983 年 2 期。
- <sup>12</sup> 当時の江蘇省文物保管委員弁公室主任、梁白泉のインタビュー、2013 年 10 月 6 日、南京。



- <sup>13</sup> 柴大為「北京文物事業五十年梗概」『北京文博』2001年1期。
- <sup>14</sup> 河北学刊特約評論員、前掲文。
- <sup>15</sup> 『江蘇省誌・文物誌』、江蘇古籍出版社、1998年、580頁。
- <sup>16</sup> 『廣東省誌・文物誌』、廣東人民出版社、2007年、71頁。
- <sup>17</sup> 『黑竜江省誌・文物誌』、黒竜江人民出版社、1994年、488, 494頁。
- <sup>18</sup> 『青海省誌・文物誌』、青海人民出版社、2001年、235頁。
- <sup>19</sup> *Mao's Last Revolution*, p. 120.
- <sup>20</sup> *Mao's Last Revolution*, p. 120. 原文では「the Hall of Scriptures Right Monastery」（経堂右寺）と表記しているが、実は「経堂右寺」でなく「経堂古寺」だと考えられる。「古」は「右」の誤りであろう。
- <sup>21</sup> *Mao's Last Revolution*, p. 522. この講話については周恩来「在中央政治局擴大會議上的講話（1966年5月21日）」（青海八・一八革命造反派聯合委員会宣伝組編印：『資料選編（中央首長講話專輯）』1967年12月5日）を参照。
- <sup>22</sup> 鄭克中「北大文革二三事」、『老照片（41卷）』、山東画報出版社、2005年。
- <sup>23</sup> 江華伝編審委員会『江華伝』、中共党史出版社、2007年、316頁；王革新「文革初期靈隠寺事件若幹問題考証」『浙江档案』2006年9期。
- <sup>24</sup> 馬霆、薛瑞沢「洛陽農機學院師生保護龍門石窟記実」『洛陽工学院学报』、2001年1期。
- <sup>25</sup> 『周恩来年譜（1949-1976）』（下）中央文献出版社、1997年、50頁。
- <sup>26</sup> 『当代中国的宗教工作』（上）、当代中国出版社、2009年、117頁。
- <sup>27</sup> 高文謙『晚年周恩来』、明鏡出版社、139頁。
- <sup>28</sup> 庄小軍、徐康英主編『風雨同舟 南京探索前進三十年』、中共党史出版社、2002年、435頁。
- <sup>29</sup> 『当代中国的甘肅』（下）、当代中国出版社、2009年、278頁。
- <sup>30</sup> 『陝西省誌・文物誌』三秦出版社、1995年、609頁。
- <sup>31</sup> 『山西省人民委员会关于在无产阶级文化大革命运动中注意保护文物和处理有毒书籍的通知』、『山西政報』1966年第12期。
- <sup>32</sup> 『江華伝』、316頁；『周恩来年譜（1949-1976）』（下）、55頁。
- <sup>33</sup> 馬霆、薛瑞沢、前掲文。
- <sup>34</sup> 亜子、良子『孔府大劫難』、天地圖書有限公司、1992年、87-90頁。
- <sup>35</sup> 『中共曲阜地方史（第2卷）』、中共党史出版社、2008年、354-355頁。
- <sup>36</sup> 『南華寺原住持披露文革期間保護六祖真身秘事』、中国新聞網2007年7月27日。
- <sup>37</sup> 『為什麼帝國主義和修正主義聯合在一起瘋狂攻擊中國共產黨和中國無產階級文化大革命』、『人民日報』1967年1月8日1版。
- <sup>38</sup> 謝辰生へのインタビュー、2012年11月、北京。
- <sup>39</sup> 『首都革命造反派發出關於保護古旧書刊、文物倡議書』、首都出版系統革命造反派委員會主弁：『紅色宣伝兵』第一期、1967年3月6日；文化部文物局、故宮博物院、中国歷史博物館等十二个单位造反派『戚本禹同志與圖書、文物、考古、博物館等單位革命造反派代表座談時的講話紀要』、1967年1月30日。
- <sup>40</sup> 陳曉農：『陳伯達最后口述回憶』、星克爾出版有限公司、2005年、304頁。
- <sup>41</sup> 王力：『王力反思錄』下冊、香港北星出版社、2001年、1273頁。
- <sup>42</sup> 戚本禹：『戚本禹回憶錄』、中国文革歷史出版社、2016年、505頁。
- <sup>43</sup> 同上。
- <sup>44</sup> 『首都革命造反派發出關於保護古旧書刊、文物倡議書』。
- <sup>45</sup> 孫春華「憶北京市文物局藏近現代新善本書刊文献的來歷」『北京文博』2005年4期。
- <sup>46</sup> 国家文物局編『中華人民共和國文物博物館事業紀事』、文物出版社、2002年、232頁。
- <sup>47</sup> 同上、232-233頁。
- <sup>48</sup> 謝辰生へのインタビュー、2012年11月、北京。
- <sup>49</sup> 謝辰生へのインタビュー、2016年7月、北京。
- <sup>50</sup> 王可「周总理与文革中的文博事業」『縱横』2008年7期。
- <sup>51</sup> 『北京誌・文物卷・文物誌』、651頁。
- <sup>52</sup> 『陝西省誌・文物誌』、525頁。
- <sup>53</sup> 王慶章「湖南省文化局局長王慶章同志在全省文博工作座談會上的講話」『圖書館工作』1978年1期。
- <sup>54</sup> 『山西通誌・文物誌』中華書局、2001年、1190, 1101頁。